

ジョセフ・L・レクトン「ぼくはマサイ」 さ・え・ら書房 2006年

著者：ジョゼフ・レマソライ・レクトン (Joseph Lemasolai Lekuton)

遊牧民の子どもとしてケニア北部に生まれる。十代の終わり近くになってアメリカに渡り、セント・ローレンス大学で文学士号と修士号を取得し、ハーヴァード大学では国際教育政策の修士号を取得する。現在はヴァージニア州北部にあるラングリー校で歴史を教えるかたわら、1年の半分をケニアで暮らす。

ぼくはその学校に7年生までいましたが、長い休暇になるたびに、帰り道をさがすという仕事が待っていました。これは、ひどくむずかしい仕事でした。村までは8キロかもしれないし、80キロ離れているかもしれないのです。家族がどのあたりにいるのか見当もつかず、さがしながら歩くこともありました。同じ地域からかよってくるほかの子どもたちといっしょに歩くのです。学校の車で、大きな道路沿いの地点まで送ってもらい、おりたところから歩くこともありました。たいていは、帰り道のとちゅうに村や野営地があり、大勢の人に出会います。日がくると、だれかの家に泊めてもらって、また先をすすんでいきます。もし人に出会わないときは、洞穴を見つけたり、木の上で眠ったりしました。自分の家族をさがすのに、いちばん長いときは2週間もかかりました。P 64



S・S・サンカン「我ら、マサイ族」 どうぶつ社 1989年

著者：マサイ族の長老の一人

まだ正式な結婚式を行なう前に子供を生んでしまった女性と結婚する場合、婚資としては、一頭の牝牛と一頭の去勢牛だけが納付される。しかし、このような場合でも、結婚式の当日用の家畜には、前述したものと同じものが用意されるのである。(中略)

ときには、このような慣習を無視して、男と女が一緒に暮らしてしまうことがある。この場合、彼女は、正式な手順をふんで結婚した女性が「エサイノティ」と呼ばれるのに対して、「エンカピアニ」と呼ばれて、一段低く見なされる。彼女が、何らかの理由で相手と別れたとき、子供がいれば、その子供を連れて実家へ帰ることは許される。(中略)

いったん正式な結婚をして子供を生み、そのあと、夫と離婚して、別な男性と再婚した

場合の女性は、「エンキアムプリ」と呼ばれている。また、ずっと年上の年齢組の男性と結婚したあと再婚した女性は、「以前の年齢組を去ってしまった女」という意味合いの言葉で呼ばれている。

女性は、家にいて、主婦としての生活を送るよう期待されている。彼女が家を去るようなことがあると、極力、夫のもとに戻るよう説得される。それでも彼女が受け入れないと、長老たちが集まり、彼女の結婚が正式なものであったかどうか、婚資がすべて完納されていたかどうか、そのような点が調べられる。もし、その結婚が正式なものであったと判断されると、彼女の離婚は、事実上、不可能となる。

さらにかたくなに嫁ぎ先に戻ることを拒否したとしても、別な男性との、いわゆる正式な結婚は許されない。彼女が、説得を無視して別な男性と暮らし始め、子供が生まれた場合、妻が生んだ子供に対する権利は夫に帰属すると考えられているから、婚姻上の夫は、彼女が生んだ子供のすべてを連れて行くことさえ出来るのである。ただし、実際には、彼女の新しい相手である男性のもとに一人だけは残されるものである。このように、妻が夫から逃げ出して別な男性と一緒にになり、多くの子供を生んだとしても、その子供に対する権利は、婚姻上の夫が保有しているものなのである。

女性というものは、子供に拘束されているものである。そのため、残してきた子供に何かが起これば、しばしば子供のところに戻って来ることがある。しかし、そのような事情があっても、終生、別な男性と暮らし続ける女性もいる。こうなってしまうと、彼女の婚姻上の夫は、彼女のために要した諸費用を、もはや請求できなくなってしまう。一方で、新しい相手と別れて、再度、夫のもとへ戻ると、相手の男は、その間に彼女のために要した諸費用を、夫に対して請求することが出来る。

話し合いによって正式に離婚が成立した場合、妻方の両親は婚資として納付された牛や羊を、夫方に返還しなければならない。しかし、夫は、結婚式のために使用した蜂蜜、酒、一枚布、それに新婦のために作られた皮スカート、さらには彼女の両親に贈った仔羊や真鍮製の装飾品までは、取り戻すことが出来ない。P 85~87

デーヴィッド・リード「マサイ族の少年と遊んだ日々」どうぶつ社1988年

筆者：1922年生まれのイギリス人、マサイランドで少年時代をすごした白人男性

エンティト(未割礼の少女)がライオニ(未割礼の少年)に興味を示しはじめると、普通は8歳か9歳の頃だが、ただちにエンティトはライオニたちと一緒に出歩き、性的遊びにふけるようになる。だから、彼女が戦士たちと性交渉をもつ準備のできた11歳から13歳頃には、すでに処女ではなくなっている。(中略)

飲めるだけの牛乳を飲み終わると、彼は新しい恋人を一軒の小屋に連れて行く。ほかの者たちもついていく。二人は睦み合いながらその夜を過ごし、以後二人はアサンジャ(恋人)の関係として知られることになる。

一人の戦士が同時に50人ものアサンジャを持つこともあり、同じことは一人の娘にもあてはまる。アサンジャであれば、ほかの誰よりも常に優先権をもち、そしてある娘は、結婚するまで、ある戦士のアサンジャであり続ける。

ある戦士が娘たちの人気者で、結果として同ジエマニャタに数人のアサンジャを持つという状況が起こりうる。このような場合、しばしば波瀾が生じるので、彼には、力を貸してくれる友人たちを連れていくことが許されている。彼らは、みんなでベッドを共にする。

一つのベッドには8人くらいまで寝ることができる。だが、彼らは、その夜は同じパートナーを相手にするだろう。次の夜にはパートナーをかえることがあるにしても。

割礼を受けていない娘(エンティト)は妊娠してはいけないことになっているので、膣外射精が行なわれるようだ。けれども、もちろん間違いは起こるのであって、ときには墮胎に訴えることも。墮胎が不成功に終わったときは、クリトリスの切除—すなわち割礼が施され、ただちに結婚ということになる。

アサンジャの関係が成立したあと、同じ儀式でさらに別の二つの関係が結ばれることがある。一つはオルディペットの関係と言い、この関係を結んだ娘は戦士に対してアサンジャの次に優先権を持つ。もう一つの関係はオルギロティと呼ばれている。これらの関係にある娘たち同士は、お互いの合意によって、お互いの地位を交換することができるが、アサンジャだけは、結婚によって夫と結ばれるまで、自分の最優先的な地位を失うことはない。

ときには、娘は自分のアサンジャと結婚することもあるが、こういうことはまれである。なぜなら、結婚に関しては、普通は、彼女がまだ幼い子供のうちに、事前の取り決めが父親によってなされているからである。(中略)

女性は結婚したあとも自分のアサンジャと関係をもち続けることもあるが、男性のほうには彼女に対して、もはやいかなる権利も持っておらず、今や彼は別の諸規則に従わなければならない。

娘の結婚の取り決めは、しばしば彼女が実際に生まれる前から双方の父親のあいだでなされ、婚資(結納に相当するもの)もその時に支払われる。生まれた子供が女でないときには、妻かあるいは自分の別の妻の次の妊娠まで、契約を持ち越すことができる。娘は、父親が選んだ夫にしばられているにしても、割礼がすんで自分の意志で彼と結びつくまでは、実際に彼の妻となるわけではない。P 1 1 4~6

娘は数人の女性たちによって体を押さえられ、好きなだけわめいたり、あばれたりしてもよい。そうしても不名誉ではないことになっている。けれども、手術は、いったんはじまると、力づくで最後まで行なわれる。中断や延期は、いっさい許されない。

割礼というのは、まずクリトリスのまわりの包皮を半インチほど切り除き、そしてクリトリス自体も4分の1インチほどの深さに切り取られるのである。さらに、クリトリスの下から膣口に向けて切れ目が入られる。この粗野で残酷ともいえる手術がほどこされる理由は、膣口を大きくし、そうすることで出産を容易にするためである。そして、クリトリスの切除は、性的刺激を少なくし、したが乱交を防ぐというのが理由らしい。P 1 1 8

オルゲシエルの儀式(=戦士の地位から長老の地位への移行)は、ほぼ10年に一度ずつ行なわれる。これに参加する戦士は35歳から45歳ぐらいのあいだで、儀式が行なわれる場所はいつもほぼ同じである。(中略)

各地から集まった戦士のなかから、49人の戦士が選ばれる。彼らは、それぞれ自分の集団のリーダーでもある。そのなかから、さらに、とりわけ優れた3人の戦士が選ばれる。そして今度は、この3人がお互いのなかから全体のリーダーであるロスルティアを選ぶ。49人の戦士は、そしてとりわけスルティアは、あらゆる点でほかの人たちより優れていることを自ら証明した人たちである。選出は、世襲とはいっさい関係がない。

儀式の前に、中央の小屋を中心として、そのまわりに49の小屋が女たちによって作られる。中央の小屋は、まわりの小屋よりかなり大きく、儀式に出席する最も背の高い戦士でも、直立して頭がつかえないほど天井が高くなければならぬ。この小屋はオスィンギ

ラと呼ばれ、ここで49人のリーダーたちが儀礼を受けるのである。

長老に昇進することが予定されているほかの上級戦士たちもすべて参加し、この49の小屋に分散して泊る。儀式が行なわれる区域の外に正式なエマニヤタも建てられ、そこにも戦士たちが収容される。耳の中央部に二つの穴をあけていない戦士も長老にはなれるが、しかし儀式の中核には参加できないようだ。彼らの儀礼は、儀式の行なわれる区域の外で行なわれるのである。(中略)

いよいよ戦士たちの頭が剃られる。最初はロスルティアで、次が選出された2人の仲間、そしてほかの戦士たちがあとに続く。頭を剃ったあと、戦士たちは、身分を示すものを身につける。これは、特製の噛みタバコ入れや嗅ぎタバコ入れである。頭を剃っていない者にはその資格がない(これは、長老になる用意をしていない戦士は1人もいないという意味である)。儀式の各段階で、まっ先に行なうのは、いつもロスルティアである。

それから、49人の戦士たちは中央の小屋に入る。そこへ、女たちが、アイメスィタが殺した牛の肉を調理して持ち込んでくる。肉は、よく乾燥した獣皮にもられて、最初にロスルティアに、彼が選んだ女性によって差し出される。この女性の役割は重要である。ロスルティアは、自分がとくに魅力を感じる女性を、あらかじめ選んでおかなければならない。というのは、まもなく彼は、彼女を相手に、人々の前で、自分の性的能力を証明しなければならないからである。

アイメスィタが立ちあがって、ロスルティアに呼びかける。「あなたは立派な戦士であることを証明してきた。今日まで、いかなる汚名も着せられたことがない。だが、今この瞬間、あなたは、割礼を受けた女性が目にし、手にふれ、調理した肉を食べた。それは、あなたが、あなたの年齢集団を侮辱したことになる。あなたは、戦士としての尊厳を失ってしまった。だが、あなたは、なお優れた血脈を有している。そこで、あなたに残された唯一のことは、長老となって、子孫を残すことである。あなたは、ここにいる全員の前で、あなたがなお人々のために価値ある人間であることを証明しなければならない」

このような口上をきっかけにして、ロスルティアに肉を差し出した女性が腰布のひもをゆるめる。そして彼は、彼女を抱きかかえると、力づくで小屋の外へと連れていく。アイメスィタがそのあとを追う。そして、みんなに、よく見届けるように呼びかける。外に出て、彼女は腰布を脱ぐ。このとき、もうロスルティアは性的に興奮しきっている。彼女の上衣を引きちぎるように脱がせると、それを彼女の背中にあてがって、彼女を地面に押し倒す。

彼は、ただちに彼女の中へ入っていく。オルガスムに達するのが早ければ早いほど、彼は高く評価される。やがて2人は立ちあがる。彼女は、ロスルティアがうまくやったことを証明するために、足を広げてその場に立つ。精液が彼女の太ももを伝わって落ちるのを人々は見る。

アイメスィタは、払いをふって、すべてが順調にいったという合図を示す。これはまた、次なる興奮のはじまりの合図でもある。女たちは、ただちにひもをゆるめて、腰布をおろす。女たちは、好意を持っている男の方へ向かう。けれども、しばしば別の男が待ち受けている。二人が同じ氏族同士でない場合、二人はただちに性交をはじめ。ふつうは、男が女を手で地面に押し倒すようにするのだが、しばしば女もその手をつかんで、相手を自分の上に導こうとする。

女は、最初の相手と五分ほども一緒にすごすと、もう立ちあがって次の相手を探し出す。